

「四つ目の依頼」

「
四
つ
目
の
依
頼
」

（
某
ス
ナ
イ
パ
ー
モ
デ
ル
）

大
太
大

【あらすじ】

ニューヨークタイムズ紙の三行広告欄に「D-トラクター求む」の広告が一度に三件掲載される。この広告を「仕事の依頼」としていたスナイパーのディック・西郷は自分への挑戦と捉え、その真相を探るべく依頼を全て引き受ける。

依頼者は全員IT大手ゴーゴル社の社員で、内容は在籍拠点管理責任者の狙撃、場所は異なるが同時刻だった。ディックは天才ハッカーのケビン・笠谷に調査を依頼する。

ケビンの調査の結果、依頼者の三人は個人のPCでグループが組めるSNSにアクセスしていたこと、そこにゴーゴル社副社長のジョン・ミトニックが加わっていたことが判明する。だが、既にPCがネットから切り離されており、その内容は不明だった。

また、ケビンは各拠点がゴーゴル社単独で使える海底ケーブルの引き揚げ地近くであることをディックに指摘する。もし、そのケーブ

「四つ目の依頼」

ルが一時的にでも使用不能になれば、ゴーゴル社のアメリカから海外へのサービスの約八〇％が麻痺する可能性がある事も説明する。それを受けて、ディックはケビンにジョンの動向を追うよう指示する。

ディックはケビンからの情報で、ジョンとFBI特別捜査官のロバート・ドレイバーが会うことを知り、自身が会話を盗聴できるようにケビンに指示する。盗聴に成功したディックは、今回の依頼が成功すればジョンがトラブルに乗じてCEOの座を奪って反トラスト法への対応が思い通りにでき、失敗してもロバートがディックの狙撃を阻止したとして株が上がり、どちらに転んでも損はない、という狙いであることを掴む。

全てを把握したディックは、ケビンに依頼者三人全員とロバートに心拍数を送信できるように改造したスマート・ウォッチ（SW）の送付を指示。銃職人のデИБ・ハリソンには、弾丸二発を装填した銃をスターリンクの送受信アン

「四つ目の依頼」

テナをつけたドローンへ装着し、各拠点とロバートが居るFBIピッツバーグ支局の四箇所の近くへ送るよう依頼する。

一方、ゴーゴル社CEOのマティ・ストールマンは、ジョンの大企業然とした考え方や反トラスト法への強行姿勢などを憂い、警告の意味での狙撃をディックに依頼するが断られる。しかし、ディックはマティに一つ頼み事をし、お前の悪いようにはならないと告げる。

そして、ディックはゴーゴル社近くのTV中継車を装った車内で、依頼時刻直前に四機のドローンを遠隔操作して依頼者三人とロバートを狙撃、各々に付けられたSWで心拍の停止を確認し、これも狙撃して破壊する。

その後、ディックは一人乗りドローンでゴーグル社・本社へ向かい、マティはディックの依頼通りジョンを会社横の公園へ連れ出す。そしてディックはドローン上からジョンを狙撃する。マティはディックの言葉の意味を知り、自分の行おうとしていたことを考えさせられる。

【登場人物】

ディック・西郷（？）・・・スナイパー

ケビン・笠谷（かさや）（35）・・・天才ハッ

カー

ディブ・ハリソン（67）・・・銃職人

マティ・ストールマン（39）・・・ゴーゴル社

CEO

ジョン・ミトニック（53）・・・ゴーゴル社 法

務担当副社長

ロバート・ドレイバー（43）・・・FBI特別

捜査官 ペンシルベニア州ピッツバーグ支

局勤務

デビッド（依頼者A）（28）・・・ゴーゴル社

社員、ニューヨーク州シアトルオフィス勤務

社員1・・・同右 勤務

社員2・・・同右 勤務

社員3・・・同右 勤務

「四つ目の依頼」

社員4・・・同右 勤務

依頼者B・・・同右、ノース・カロライナ州チ

ヤペルヒルオフィス勤務

依頼者C・・・同右、ニューヨークオフィス勤

務

キオスクの新聞売り（ニューヨーク）

A b e r E a t s 配達員（シアトル）

ゴーゴル社シアトルオフィス内の購買担当者

マティ・ストールマンの運転手（シリコンバレ

ー）

保安官（シリコンバレー）

ゴーゴル社 シアトルオフィス管理責任者（姿

のみ）

ジム・クック・・・オレンジ社CEO（声のみ）

ナンシー・クオ・・・ITアナリスト（名前の

み）

マーク・ニューマン・・・同・ITアナリスト

（名前のみ）

「四つ目の依頼」

【追記事項】

※本脚本は2023年11月に初稿が書かれ、私が勝手にビックコミック編集部に送りつけたものの改訂稿になります。現在（2026年9月）とは状況が異なる場合がありますが、そのままの設定で書かれていますので、その点はご了解下さい。

※I-T関係の記述が多く、ト書きで全て説明することが難しいため、本文中に都度資料を挟んでいます。基本、実在するものです。脚本の文章量自体は67P程度になります。

※初稿の経緯があり、名前は微妙に変えています。モロに某スナイパーです（笑）

ヘイントロク

○ ニューヨーク ブリーカー・ストリート（朝）
（資料1）

「四つ目の依頼」

【資料1】ニューヨーク／ブリーカー・ストリート



<参考URL>
<https://www.newyorknavi.com/miru/11/>

T 「ニューヨーク — U S A —」
T 「ブリーカー・ストリート……」

朝霧の中、手前に向かって路地を歩いて
くるディック。

ディックを見るキオスクの新聞売り。

ディック、ニューヨーク・タイムズ紙を

「四つ目の依頼」

手に取りながら、

ディック「一つくれ」

新聞売り「毎度あり！」

百ドル札を渡して去ろうとするディック。

百ドル札を見て驚く新聞売り。

ディックに向かって、

新聞売り「おい、兄さん。お釣り！」

ディック、背中越しに、

ディック「……取っておいてくれ」

受け取った百ドル札を再度見る新聞売り。

新聞売り「……まったく、間違えたのか？ い

くら物価が高いって言ったって、新聞一つ

でそんなにしねえよ」

ディックを見る新聞売り。

新聞売り「最近はずちみたいなのところでも電子決済が使えるってのに……」

○ザ・カーライル・ア・ローズウッドホテル

「四つ目の依頼」

【資料2】ザ・カーライル・ア・ローズウッドホテル



<参考URL>

<https://www.google.co.jp/travel/hotels/entity/>

「ザ・カーライル・ア・ローズウッドホテル」

○同・一階 カフェ・カーライル(室内)

「一階 カフェ・カーライル……」

奥の席に座ってニューヨーク・タイムズ紙を読むディック。

新聞をめくり、三行広告欄に、「ディートラクター求む」の広告。

「四つ目の依頼」

それを見るディック。

ディック「……」

新聞をめくっていくディック。

別紙面の広告欄に再度「D―トラクター

求む」の広告。

それを見つめるディック。

ディック「……」

再度、広告を見るディック。

また新聞をめくっていくディック。

別紙面の広告欄に再度「D―トラクター

求む」の広告。

それを見て目を見開くディック。

ディック「!?」

驚くディック。

ディック「……」

新聞を置くディック。

ディックM「……偶然なのか？ また、俺の連

絡網を破壊するつもりなのか……、それとも

別の意図があるのか……。調べてみる必要が

ありそうだ……」

タイトル「四つ目の依頼」

Part. 1 思案

T「ニューヨーク ― USA ―」

○デッキの隠れている地下室（外・昼）

○デッキの隠れている地下室（室内）

地下室には机とノートパソコン、ロング

ソファー、パイプ作りのベッド。

ソファーに座って、トレンドをくゆらせ

ているデッキ。

デッキ「……」

（回想はじめ）

○シアトル中央図書館（外観・昼）

（資料3）

「四つ目の依頼」

T 「シアトル — U S A —」

T 「シアトル中央図書館……」

書棚に横並びで話をしている、依頼者の

デビットとディック。

口調を荒げて、ディックに話しかけるデビット。

デビット「奴だけは……、あいつだけは絶対に許せないんだ！」

ディック、書棚を向いたまま、

【資料3】シアトル中央図書館



<参考URL>

<https://hash-casa.com/2017/11/10/seattlecentrallibrary/>

「四つ目の依頼」

ディック「……静かに話してくれ」

デビット「す、すいません」

デビット「……お願いします！　引き受けて下

さい。Mr・ディック・西郷！」

ディック「……ターゲットは一人でいいんだ
な？　デビット」

デビット「そ、その通りです」

ディック「……分かった、やってみよう」

デビット「ありがとうございます！　早速、あ

なたの指定の口座に……」

話を遮るディック。

ディック「金は後でいい」

デビット、驚いた表情で、

デビット「？」

ディックを見るデビット。

デビット「し、しかし、あなたへの報酬は、全
額、前金だと聞いていますが……」

ディック「……こちらの都合だ。気にしないで
くれ……」

書棚の間の通路を歩いていくディック。

（回想終わり）

○ディックの隠れている地下室（室内）

ソファに座り、トレンドをくゆらせながら
思案を巡らすディック。

（モノローグはじめ）

ディックM「……依頼者とそれぞれのターゲット
トは、全てゴーゴル社の社員だった……」

ディックM「狙撃場所は、依頼者の働いている
ゴーゴル社の三ヶ所の拠点……、西海岸のシ
アトル、東海岸のニューヨークとチャペルヒ
ルだ……」

トレンドをくゆらせるディック。

ディックM「依頼理由は全て異なっていたが、
おそらく作り話だろう……」

ディックM「共通点は……、ターゲットが各拠
点の管理責任者だということだ……」

トレンドをくゆらせるディック。

ディックM「そして、狙撃時間はアメリカ西部

「四つ目の依頼」

時間の九月十三日十三時十三分……、全て同じだ……」

ディックM「……このあたりに、裏がありそうだな……」

トレンドをくゆらせるディック。

（モノローグ終わり）

Part. 2 報告（レポート） その1

○ディックの隠れている地下室周辺（同・外）

リュック（SOLGAARD製LEE

PACK 2・0）を背負っているケビン。

笠谷。

スマホの位置情報を見ながら、ディックの居場所を探してうろろしている。

ケビン「この辺のはずなんだが……」

辺りをきょろきょろするケビン。

ケビン「……まったく、何でこんな辺鄙なところに呼び出すんだ？」

地下室の入り口を見つけるケビン。

「四つ目の依頼」

ケビン「ここか？」

地下室への階段を下るケビン。

鉄のドアをノックするケビン。

「ガンガン」と音。

ケビン「オレだ。ケビンだ」

ドアの小窓を開けるディック。

窓には防弾ガラス。

ケビン「おまたせ！」

ディック「……五分遅刻だ。……時間は守れ」

頭の後に手をやるケビン。

ケビン「すまねえ。ギリギリまで調べててよ」

ドアを開けるディック。

ディック「……入れ」

地下室に入るケビン。

○ディックの隠れている地下室（室内）

立って壁に寄りかかり、トレンドをくゆらせるディック。

正対しているロングソファーに前屈みで座っているケビン。

「四つ目の依頼」

ディック「……話を始めてくれ」

ケビン「ああ」

ディックを見て話し始めるケビン。

ケビン「あんたの言った通り、もらったりリストの六人の奴ら、全員ゴーグル社の社員だったよ。平社員が三人、残りはそいつらが務めている拠点の管理責任者だ。だから場所は三ヶ所に分かれてるってことになる。場所は……」

話を遮るディック。

ディック「そこまでは分かっている」

眉を八の字にして、首を少し傾けて手を広げるケビン。

ケビン「なんだよ。それなら最初から言ってくれりゃあいいのによ……」

トレントをくゆらせるディック。

ディック「……確認の方法は？」

ケビン「ゴーグル社のセキュリティはガチガチだからな。正面切って社員のデータベースをハッキングするってのはオレでも無理だ」

トレントをくゆらせるディック。

「四つ目の依頼」

ケビン「ただ、こういう連中は大体SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）をやっているから、そっちの方を当たったよ」

ディック「……」

ケビン「SNSの『Z』ってやつだ。あれはアカウントさえ乗っ取れば、個人情報の入手は、オレの腕ならなんとかなるからな」

ディック「……で、どうやった？」

ケビン「『アプリ連携』って機能を使ってやるのが楽だ。『Z』では日常茶飯事だよ」

ケビン、人差し指を立てて、

ケビン「『あなたのー』スキルは、世界で何番目？』みたいな、入力が簡単で結果がネタになるようなやつで釣るんだ」

ディック「……」

ケビン、両手を広げながら、

ケビン「……ま、ハッキングと言っても、何も凄い技術がないと出来ないって訳でもないのさ」

ケビン、人差し指で自分の頭を指して、

「四つ目の依頼」

ケビン「使う人間や作った連中の考え方や心理を読んで、その隙や盲点を突くことが大事なんだ。人に寄るところも大きいんだよ」

トレンドをくゆらせるディック。

ディック「……」

ロングソファーにもたれるケビン。

ケビン「ただ、デカいことをするには、オレみたいな天才がいないとダメだけだな」

トレンドの煙をはくディック。

ディック「……続けてくれ……」

ケビン「それで、平社員の三人だが、全員同じマストロンのグループにアクセスした形跡を見つけたよ」

ディック「マストロン？」

ケビン「そうだ。簡単に言えば、個人のPCで管理できるSNSだ」

トレンドをくゆらせるディック。

ディック「……仕組みは？」

ケビン「さっきの『Z』もそうだが、SNSってのは、通常、運営会社が持ってるサーバー

「四つ目の依頼」

で管理されてる」

ケビン、キーボードを打つジェスチャーをしながら、

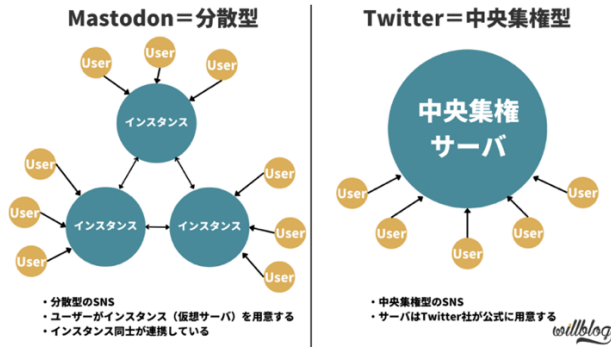
ケビン「だから、何か操作をすれば、そのサーバーにデータや履歴が残る」

ケビン、少し手を広げながら、

ケビン「だがマストロンは、積極的に他の奴が管理しているPCと繋がなければデータが漏れることはない」

ケビン「二〇二二年に『Z』にゴタゴタがあった時、その代替えとして注目されたのがこれなのさ」(資料4)

【資料4】Xとマストドンの違い(劇中ではZとマストロン)



マストドンとツイッターの違いは何ですか？

Twitterが運営元企業が一元的に管理する中央集権型SNSと呼ばれるのに対して、**マストドン**は、誰でも自由にサーバーを開設してサービスを提供でき、各開設者が管理者として独自のルールや利用規約を定めて運営することが出来る「分散型ソーシャルメディア」の形態をしています。 2023/01/16

<参考URL>

<https://find-model.jp/insta-lab/how-to-mastodon>
<https://will-blog.com/about-mastodon/>

「四つ目の依頼」

トレンドをくゆらせるディック。

ディック「……」

ケビン「結局、『Z』はそのままだったから、マストロンのネットワークはあまり広がらなかった。あんたが知らないのも無理ないと思うよ」

ロングソファーにもたれて、両手を首の後に回して体を反らせるケビン。

ケビン「……まあ、どっちにせよ、ＩＴオタクの考えそうなことだ」

ディック「……歴史の話はもういい」

苦笑いするケビン。

ケビン「悪いな。こう言う話になると、止まらなくってよ」

ディック「……で、こういうやりとりをしていた？」

ケビン「それが、分からないんだ。ＰＣがネットから切り離されちゃったようだし。そうなのと、さすがのオレもお手上げだ」

ディック「……」

Part. 3 報告（レポート） その2

ディック「……他に分かったことはあるか？」
ケビン「ああ、あるぜ。さっき話しかけた三つの拠点なんだが、全部海底ケーブルの陸揚げ地の近くだったよ」

目が少し動くディック。

「四つ目の依頼」

（ナレーション始め（海底ケーブルの説明）
主に大陸間を結ぶ通信用ケーブルで、国際通信の九九％を担っていると言われる。その直径は6cm以下、距離は一万kmを超えるものもあり、ケーブル一本で膨大なデータをやりとりすることが出来る。

IT社会を影で支える重要なインフラである。
（ナレーション終わり）

ディック「……偶然じゃないのか？」

ケビン「ところがそうでもないんだ。これを見

「四つ目の依頼」

てくれ」

リユックからタブレットを取り出しデ
ィックに渡すケビン。

タブレットに海底ケーブルの敷設図が
書いてある。

タブレットを見るディック。(資料5)

【資料5】海底ケーブルの敷設図



<参考URL>

<https://www.submarinecablemap.com>

「四つ目の依頼」

ディック「……」

ケビン「アメリカ本土周辺に敷設されている海底ケーブルは、大体このくらいあるんだ」

ケビン「一本敷設するのに数百億円かかるから、複数の企業が出資して相乗りで使うのが一般的なんだが……」

ケビン「太く表示している（注…黒色）ケーブルは、ゴール社が全部金を出して、単独で使えるものなんだ」

ケビン「その引き揚げ地が、今回のシアトル、チャペルヒル、ニューヨークのオフィスに近いんだよ。偶然だとは思えねえ」

タブレットを見ながらトレンドをくゆらせるディック。

ディック「……」

ケビン「しかも、こいつらは最新のケーブルで、他のより通信容量が大きい」

タブレットを見ながらトレンドをくゆらせるディック。

ディック「……」

「四つ目の依頼」

ケビン「この中から、アメリカからヨーロッパとアジア、主に日本だが、それらへの直通の海底ケーブルだけを見ると、オレの概算では、この三本だけで、その方面のゴーゴル社の通信容量の約80%を担っていることになるんだ」(資料6)

【資料6】海底ケーブル使用容量の概算									
アメリカからヨーロッパ・アジア（主に日本）へ通じているgoogle（劇中はゴーゴル社）が使っている海底ケーブル一覧表									
ケーブル名	ケーブル元	引き揚げ場所	一番近いgoogleのオフィス	長さ(km)	敷設年	オーナー	伝送容量(Tbit/s)	振り分け割合	googleの使用出来る容量(Tbit/s)
Havfrue/AEC-2	デンマーク、アイルランド、ノルウェー	ウォールタウン/ニュージャージー（東海岸）	—	7,650	2020	相乗り	108	FB2、Aqua2、Google 1、Bulk1	18
Grace Hooper	スペイン、イギリス	ベルポート/ニューヨーク（東海岸）	ニューヨーク/ニューヨーク	7,191	2020	単独	352	今回破壊対象のケーブル	352
Dunant	フランス	バージニアビーチ/バージニア（東海岸）	チャペルヒル/ノース・カロライナ	6,400	2021	単独	250	同上	250
Topaz	日本	バンクーバー/カナダ（西海岸）	シアトル/ワシントン	不明	2023	単独	240	同上	240
FASTER	日本	バンオン/オレゴン（西海岸）	—	11,629	2016	相乗り	60	割合不明のため全て使っていると仮定	60
Unity/EAC-Pacific	日本	レドンド/カリフォルニア（西海岸）	—	9,620	2010	相乗り	7.68	Bharti_Airtel1、Global_Transit1、Google2、KDDI1、Pacnet(Telstra)4、SingTel1	1,536
Pacific Light Cable Network(PLCN)	台湾、フィリピン	エル・セグンド/カリフォルニア（西海岸）	—	11,806	2022	相乗り	144	割合不明のため全て使っていると仮定	144
								Google総計	1,065.5
<参考URL>								単独ケーブル合計	842.0
https://www.submarinecablemap.com								割合	79.0%

「四つ目の依頼」

ケビン「もし、何かあったらえらいことだ。状況にもよるが、復旧するのに、一〜二週間じゃすまない可能性もある」

ケビン「当然、責任問題になるだろうな……」
ディック「……」

トレンドの煙をはくディック。

ディック「……その『何か』をするとしたら、お前ならどうやる？」

ケビン、手を顎に付けて、首をひねりながら、

ケビン「そうだなあ……。切断や爆破は専門外だし……」

ケビンは人差し指を出して、

ケビン「オレなら中継器を狙うな。ケーブルの途中で、信号を増幅させる装置だ。モノにもよるが、数十kmごとについてる。あれはケーブルの両端から、電圧をかけて動かしてるからな。それが一番スマートで、オレ好みだ」
ディック「……『電源を破壊する』、ということか？」

ケビン、したり顔で身を乗り出しながら、
ケビン「そう思うだろ？ 実はそれが逆なんだ」
少し目を見開くディック。
ディック「逆……？」
ケビン「そうだ」
ディック「……詳しく話してくれ」(資料7)

NEC技報 Vol.62 No.4/2009 — 35

「四つ目の依頼」

ケビン「ああ。さっきも言ったように、中継器
ってのはケーブルの両端から電圧をかけて、
その電圧差で動いてる」

ケビン、両手を前に出して、

ケビン「分かりやすいようにオレの右手が日本、
左手がアメリカとするぜ」

ケビン「通常はゼロを基準にプラスマイナス同
じ電圧をかける」

ケビン、右手を上げて、左手を下げる。

ケビン「ここでは日本がプラス、アメリカがマ
イナスにしようか」

ケビン、左手を上げながら、

ケビン「ここで、アメリカ側の電源が破壊され
て、電圧がゼロになると……」

ケビン、右手を顔の近くまで上げて、

ケビン「日本側の電圧を上げて、差をキープで
きるようになってるんだ」

ケビン、左手を右手より上げながら、

ケビン「だから、アメリカ側の電源のリミッタ
ー（上限設定）を解除して、思いっきり電圧

「四つ目の依頼」

を上げれば、電圧差は確保できるかも知れないが、アメリカ側に近いところの中継器には高電圧がかかる。だから破壊できると思うぜ」

ケビン、両腕を下ろして、

ケビン「ただ、それをやるには誰かがそういう操作をしなきゃいけないけどな」

ディック「……」

再び考えるディック。

ディック「……お前が、『それ』をやるとしたら、いつだ？」

ケビン、少し呆れて、

ケビン「あんた、さっきから物騒な事ばかり聞くなあ。オレがそういうのをやるのはごめんだぜ」

ディック「余計なことは考えなくていい……。答えろ」

ケビン、少し首を傾けながら、腕組みをして考えながら

ケビン「うーん……。そうだなあ……。」

ケビン「ゴーゴル社のサービスは、多くの会社

「四つ目の依頼」

が使っているからなあ……。もし、派手にやるなら、そいつらが一番使っている時間帯を狙うかな……」

ケビン「まあ、平日の昼間……」

ケビン、両手を合わせてから広げて、

ケビン「十二時から……十五時ってとこだ」

(資料8)

【資料8】 googleの時間別トラフィック（使用している通信容量）



<参考URL>

<https://transparencyreport.google.com/traffic/overview>

少し目を見開くディック。
考えるディック。

「四つ目の依頼」

ディック「……」

ディック「……その時、携帯電話網はどうなる？」

ケビン「今回のとは別の海底ケーブルだが、通信事業者も使ってる。影響がゼロってことはないと思うぜ」

ディック「……分かった。ご苦労だった」

ケビン「それじゃ、オレはこれで……」

リュックを背負うとして、ディックの方を振り返るケビン。

ケビン「あっ、そうそう。最初に話したマストロンだけど、あんたに言われた連中の他に、もう一人アクセスした形跡があったよ」

ディック「……誰だ？」

ケビン「こりゃ大物だった。ゴーゴル社の副社長ジョン・ミトニックだ」

少し目を見開くディック。

ディック「……」

トレンドをくゆらすディック。

ディック「……その副社長をマークしてくれ」

「四つ目の依頼」

ケビン「お、おい！ オレは探偵じゃねえぞ!?」
ディック「……お前のスキルを使え」

Part. 4 仕掛け

○ディックの隠れている地下室（室内）

T「数日後……」

ケビンからディックのスマホに着信。
電話を取るディック。

ディック「……俺だ」

ケビン（声）「あんたか？ ケビンだ」

ケビン（声）「例の副社長が、ゴーゴル本社近くの
シャシホテルってところに来る。今日だ。
予約システムをハッキングして分かったん
だ」

ディック「……誰かと会うのか？」

ケビン（声）「ああ。『ロバート・ドレイバー』
って奴だ」

ディック「……盗聴はできるか？」

ケビン（声）「大丈夫だ。部屋の電話はWi-Fi

「四つ目の依頼」

「だ。ハッキングして聴くなんざ訳ないさ」
「ディック」では、頼む」
「ディック」準備が終わったら、俺が呼びかける
まで、そっちの盗聴音は切っておいてくれ」
「ケビン（声）」了解だ。連絡待ってるぜ！」

Part. 5 捕捉

○シャシホテル（外観）（昼）（資料9）

【資料9】 シャシホテル



<参考URL>
<https://www.booking.com/hotel/us/and.ia.html>

T「シリコンバレー」USA」

「四つ目の依頼」

T「シャシホテル……」

○同・ホテル内（同）

早足で廊下を歩いてくるロバート。

ジョンの居る部屋の電話がピ！と鳴って、電話機の横のライトが点灯する。

X

X

X

○ディックの隠れている地下室（室内）

ワイヤレスイヤホン付けているディック。
ク。

X

X

X

ロバート、ノックしてドアを開ける。
ソファアに座っているジョン。

ロバート「お待たせしました」

ジョン、立ち上がって、

ジョン「おお、ロバート君、すまないな。わざわざピッツバーグから来てもらって」

ジョン、帽子のつばを左から右になぞるような仕草をしながら、

ケビン「ところで、最近のFBI特別捜査官ってのは、こういうのは被らないのか？」

「四つ目の依頼」

□バート「ははは、冗談はやめて下さいよ、ミトニックさん。ゴーゴル社の副社長がそんな子供じみたことを。あれは昔の、それもＴＶの中の話ですよ」

ジョン「そうだな」

ジョンと□バート「ははは……」

ジョンが座席に手を向ける。

ジョン「まあ、座ってくれ」

□バート「はい。失礼します」

□バートがジョンと対面のソファに座る。

○シャシホテル（同）

ジョン「こちら車を出すと、面倒なことになりかねないからな。勘弁してくれ」

□バート「分かっていますよ」

□バート「私の方は調査に行きます、で大体済みますから。もちろん、ミトニックさんの会社を……と。楽なものです」

ジョンと□バート「ははは……」

「四つ目の依頼」

ジョン「しかし、ロバート君。反トラスト法には、ほとほと手を焼いているよ。二回目だしな」(資料10)

【資料10】反トラスト法

米司法省 グーグルを反トラスト法違反の疑いで提訴

2023年1月25日 4時18分

アメリカ司法省は、IT大手のグーグルが、反競争的な買収を通じて、インターネット広告市場の競争を妨げているなどとして、日本の独占禁止法にあたる反トラスト法違反の疑いで提訴しました。ネット広告事業の一部を切り離すよう求めている、裁判の行方によってはグーグルのビジネスモデルの根幹を揺るがす事態になりそうです。

アメリカ司法省は、24日、グーグルが、反競争的な買収を通じてインターネット広告市場の競争を妨げているなどとして、カリフォルニア州など8つの州とともに、バージニア州東部地区の連邦地方裁判所に提訴しました。

司法省は、2008年にネット広告配信のインフラ企業を買収するなど、グーグルがあらゆる分野でネット広告市場を独占しているほか、広告主などに自社の製品を使うよう強要しているなどと指摘しています。

そして、ネット広告を配信する効率を上げるためのシステムなど、ネット広告事業の一部を切り離すよう求めています。

これに対しグーグルは「司法省は技術革新を遅らせ、広告費を引き上げ、何千もの小規模なビジネスの成長を困難にする」などと反論しています。

司法省は、2020年にはインターネットの検索の分野で反トラスト法に違反したとしてグーグルを提訴していて、提訴は2回目です。

ネット広告事業は、グーグルのビジネスの中心の1つで、裁判の行方によってはビジネスモデルの根幹を揺るがす事態になりそうです。

<参考URL>

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/>

ロバート「そのようですね。こちらも言った以上は、という感じですから」
ジョン「もちろん、ウチも司法省の調査体制は調べているんだが……。その時に、君のことを知ってたな」
ロバート「それで、私に声をかけて頂いたと言う訳ですね」

「四つ目の依頼」

ジョン「そうだ」

□バート「……で、どういう評価だったのですか？」

ジョン「野心的な人間で、今回の計画の力になってくれると思ったよ。君にはワシントンがお似合いだ」

□バート「それは光栄です」

ジョン「ディックのことを教えてもらって、計画が実行できると確信したよ」

□バート、座ったままお辞儀をして、

□バート「ありがとうございます」

X

X

X

□バート「……ところで、ミトニックさん。反トラスト法ですが、何か策はあるのですか？」

ジョン「ああ、手は打っているよ」

□バート「どのような、ですか？」

ジョン「ウチの連中に、メールの宛先に弁護士を含めるように、と指示を出し始めている」

□バート「そういう対応しようと……」

ジョン「ああ。そのメールは、発信者と弁護士

ロバート「なるほど。あくまで合法的な方法で、

【資料 1 1】反トラスト法に対する対策

WIRE 4 BUSINESS CULTURE GEAR MOBILITY SCIENCE WELL-BEING OPINION 02 MEMBERSHIP

PARISH DATE BUSINESS 2023.09.12

検索におけるグーグルの優位は「公正な競争の結果」なのか？ まもなく始まる裁判の重要な論点

グーグルの検索エンジン内における「独占」を巡る反トラスト法裁判が始まる。独占的な地位を握ったことで消費者が不利被害を受けているという政府側の主張に、競争が「自由」な競争の主張、果たしてどちらが認められるのか。

グーグルが勝訴すればどうなる？

裁判によって誰かが「刑務所」に入れられるわけでもなければ、消費者にお金に戻ってくるわけでもない。それでもグーグルは特定の事業戦略の採用を禁じられたり、一部の部門の売却を命じられたり、競合他社に対してより友好的な態度をとるよう求められたりする可能性がある。

「今回の裁判は各州が協力してリソースを共有すれば、屈指の強大さを誇る企業を訴えることも可能であることを示すものになります」と、コロラド州司法長官のワイザーは言う。裁判ではワイザーの代理やワイザーが裁判のために雇った補佐官が陳述を予定している。それをワイザーは今月少なくとも1回は法廷で見守る予定だ。

グーグル側が最高のかたちで勝訴するとすれば、問題視されているグーグルの戦略によって検索分野での競争が抑制されたわけではなく、実際には促進されたメタファが判断するシナリオが考えられる。そう判断されれば、グーグルが検索結果にますます広告を表示するようになってきたことで誰もが不便な思いをしてきたにもかかわらず、これはサービス品質の低下を示すものでもなければ、消費者に危害を与えるものでもないかと判断されることに実質的に等しい。

グーグルのグローバル問題担当プレジデントのケント・ウォーカーによると、現在これまでになく競争が激しくなっているという。「人々がGoogle 検索を使ってくださっているのは、ほかに選択肢がないからではありません。Google 検索を使いたく使ってくださっているのです」と、ウォーカーは語る。「わたしたちは大変な努力の末に成功を勝ち取っています。米国の皆さまに役立てていただけるサービスを全力で構築してきた結果として勝ち取った成功なのです」

<参考URL>
<https://wired.jp/article/>

裁判の公開の可否も焦点に

このように、原告側の大きな主張はかなり判明している。しかし、その詳細の多くは明かされない見通しであり、一部の詳細は非公開となることがかなり以前に決定している。

グーグルの秘密情報を保護するために、裁判日程の多くは傍聴人もメディアもシャットアウトして進むことになる。グーグルがGoogle 検索を標準搭載するよう求めて提携企業にいくらか支払っているのかということなども、耳にできるのは判事のメタファのみだ。

裁判のなかで傍聴可能な日程の法廷の様子のオンライン配信をメタファが許可するかどうか、いまの段階では明らかにされていない。このためメタファの判断によっては、一般の人々による情報へのアクセスが焦点となる裁判の模様を、一般の人々は傍聴人以外は見られないことになるかもしれない。

グーグルと対立する公共団体は、リモート視聴を可能にするよう求めてきた。「グーグルの反競争的な行為に光を当てるには、一般の人々も見られるようにすることが極めて重要です」と、「American Economic Liberties Project」で上級法務顧問を務めるケイティ・ファン・ダイクは言う。

また検察側をいら立たせている点として、グーグルは従業員に対し、必要でもないのに社内メールの宛先に弁護士を含めることを推奨していた。こうすることで、メールでのやり取りに弁護士と依頼者間の秘密特権が適用されて証拠採用できなくなるうえに、今回の訴訟に関連する事業戦略に関する社内のやり取りの記録の削除が可能になっている。しかし今回の裁判では、こうしたやり取りよりさらに重要な争点があるのではないだろうか。

競争推進団体「Public Knowledge」副代表のシャーロット・スレイマンは、グーグルの強化によって検索品質が低下していると非難が集まっているが、それによって人々はどうのような情報へのアクセスの機会を奪われてしまったのだろうか——という点を追求している。スレイマンは、Google 検索を使って幼い娘のために砂糖なしのマフィンのレシピを探していた際に直面した問題を例に挙げている。

「検索結果に表示されているレシピが本当にまともなレシピなのか、その確証がまったくありません」と、スレイマンは言う。「検索業界に本当に競争が存在すれば、検索結果の品質管理があってしかるべきだと思います」

そうなっていれば、何百万もの家族が検索結果が原因でトラブルに巻き込まれることを防げていたかもしれない。

(WIRED US/Edit by Daisuke Takimoto)

の間でのやりとりとみなされるから、秘匿特
権が適用されて、裁判の時に、証拠にできな
くなるんでな」(資料 1 1)

「四つ目の依頼」

と言うことですね」

ジョン「もちろんだ。その連絡をして、積極的に賛成してくれた奴らを今回の依頼役にしているんだ。ディックが依頼を全て引き受けた、と連絡をもらっているよ」

ロバート「まずは、うまく行ったようですね」
ジョン「しかし、君からのディックの情報だと、引き受けてくれるか少し心配だったが……」
ロバート「奴は派手なことをしているように見えて、実は慎重で用心深い」

ロバート「あれだけ露骨な依頼の仕方をされれば、当然、裏を探るはずですよ」

ロバート「そして、全てを知るために依頼を受けざるを得ない」

ロバート、少し両手を広げながら、

ロバート「……そういうことです」

ジョン「なるほどな」

×

×

×

○ディックの隠れている地下室（室内）

ワイヤレスイヤホン付けて会話を聞い

「四つ目の依頼」

ているディック。

ディック「……」

×

×

×

ロバート「……しかし、ミトニックさん。依

頼役の社員は大丈夫だったのですか？」

ジョン「何がだね？」

ロバート「いきなり殺しの依頼というのは、

素人にはハードルが高いのではないかと……

……」

ジョン「ははは……」

ロバート「？」

ジョン「そのことなら心配ない。腕を狙撃して

くれ、という依頼にしてある」

ロバート「腕を……ですか？」

ジョン「ああ。海底ケーブルの電圧を操作する

隙が出来れば、それでいいんでな」

ジョン「後は、依頼役がやってくれる」

ロバート「だから……」

ジョン「それに、君に教えてもらったディック

への依頼の『流儀』も守ってやってくれたよ

「四つ目の依頼」

うだし……」

ロバート「でも、奴が只者ではないことは、感じていたはずですが……」

ジョン「そうだろうな。だが、検索してもディックの情報は出てこないし、それ以上調べようがない」

ジョン「結局、そこで終わりだよ」

ロバート「ええ……」

ジョン、首を横に向け、顎に手をやり、

ジョン「……そう言えば、君に教えてもらっ

たのと一つ違うことがあったようだ」

ロバート「……と、言いますと？」

ジョン「『報酬は後でいい』……と」

ロバート「……まあ、裏がなければ、三つの依頼を同時にですから……。いくら奴でも無理でしょう。弱気になったのではないですか？」

ジョン「君がそう言うのなら、気にしないでおくよ」

ジョン「あとは警察が気になるが、さっきも言った通り腕の狙撃だから、傷害事件で容疑者

「四つ目の依頼」

不明のままお蔵入りって線だろうな。州をまたがるような事件になることはないよ……」

ジョン、ロバートに問いかけるように、

ジョン「でも誰かが、怪しいと思って調べ出し

たら……」

ロバート「その時は私の出番……、ということですね」

ジョン「そうだ」

ジョン「依頼が成功すれば、責任問題を追求して、オレがゴーゴル社のCEOになって、反トラスト法への対処も自分の思うようにできるし」

ロバート「失敗すれば、奴の仕事を阻止したとして、私はこの世界で一目置かれ、ワシントン行きは確実。そして、FBIの株も上がる」

ジョン「どっちに転んでも、損はしないってことだ」

ジョンとロバート「ははは……」

ロバート「ミトニクさん、成功した場合の私の処遇もお忘れなく」

「四つ目の依頼」

ジョン「分かっているよ」

ジョンとロバート「ははははは……」

○ディックの隠れている地下室（室内）

ジョンとロバートの会話を、ワイヤレス
イヤホンで聞いているディック。

ジョンとロバート（声）「ははははは……」

鋭い視線のディック。

ディックM「……有罪（ギルティ）（Guilty）」

ワイヤレスイヤホンに、手を添えるディ
ック。

ディック「ケビン、聞こえるか？」

ケビン（声）「聞こえてるよ。終わったのか？」

ディック「お前に、もう一つ頼みたいことがあ
る」

ケビン（声）「かまわねえが、探偵以外のことに
してくれよ」

「四つ目の依頼」

○デИБの仕事場（昼）

鉄のドアを開けて、入ってくるディック。

ディックに目をやるデИБ。

デИБ「あんたか……」

机に手を突っかけてディックを見るデ
イブ。

デИБ「今度は何の注文だ？」

ディック「……M16を、四丁用意してくれ」

デИБ、少しにやけた顔で、

デИБ「また、派手にやるみたいだな……」

デИБを睨むかけるディック。

ディック「……」

デИБ「分かつとる、何も言わんよ」

デИБ「……で、このままでいいのか？」

ディック「バッファークューブはそのままで、
ストックとグリップ、ハンドガードを外して
くれ」

驚くデИБ。

デИБ「えっ？ 四丁全部か？」

「四つ目の依頼」

ディック「そうだ」

困惑するディブ。

ディブ「そ、そんなことしたら、構えることすらできんぞ？」

ディック「……撃ち方は気にしなくていい」

少し顔を背けるディブ。

ディブ「……ったく、このくらい、あんたでもできるだろうに」

ディック「……」

ディブ「……他には？」

ディック「あと、マガジンを出来るだけ短くしてくれ」

ディブ「マ、マガジンを短くだって!？」

ディック「ああ。銃を出来るだけ軽くしたい」

苛立つディブ。

ディブ「あんだ、銃をなんだと思ってるんだ!？」

ディック「……出来るのか？出来ないのか？」

諦めたような表情のディブ。

ディブ「……やるよ。それほど難しいことじゃ

「四つ目の依頼」

ないからな」

デИБ「……で、マガジンには何発入れるようにしておけばいいんだ？」

ディック「……一発だ」

ほくそ笑むデИБ。

デИБ「まあ……、そうだろうな……」

ディック「それとチャンバーにも一発、ロッキングした状態で頼む」

デИБ「??」

驚くデИБ。

デИБ「銃一丁に二発なのか？」

ディック「そうだ」

ディックを見るデИБ。

デИБ「……いつにも増して、今回のあなたの注文は、よく分らんわ」

ディック「……余計なことは考えなくていい」

ディック「それと……」

デИБ、目を見開いて、

デИБ「まだあるのか!？」

ディック「カメラ付きスコープを取り付けてく

「四つ目の依頼」

れ」

ディック「カメラの動画伝送と、トリガーの制御にスターリンクを使いたい」

ディブ「スターリンク？」

ディック「ああ、衛星通信だ」

ディブ「初めて聞くな」

ディブに紙を差し出すディック。

ディック「3日後に、ここに荷物が届く。それに取り付けて、この住所に送ってくれ。衛星通信の仕様も書いてある」

仕様の書かれた紙を凝視するディブ。

ディブ「うん、こりゃあ……、難しそうだなあ……」

ディブを見るディック。

ディック「……お前の手に余るようなら、信頼できる人間に頼んでもいい」

下を向いて、ディックの言葉にピクリと動くディブ。

ディック「……だが、最終確認はお前がしてくれ」

「四つ目の依頼」

デИБ、下を向いたまま語気を強めて、
デИБ「分かつとる！」

上向き加減でディックを直視するデ
ブ。

デИБ、小声で、

デИБ「……デИБ・ハリソンが……、あんだ
に渡す銃だぞ……」

表情を少し緩めるデИБ。

デИБ「……間違えはせんよ……」

デИБを見るディック。

ディック「……」

ディック、立ち去ろうとして振り向き様
に、

ディック「頼んだぞ……、デИБ」

ドアを開けて、デИБの仕事場から出る
ディック。

部屋の椅子にどかと座るデИБ。

デИБ「ふうっ、悟られたか……」

天井を見るデИБ。

デИБ「……ワシも、まだまだだ……」

「四つ目の依頼」

○ナレーション始め（スターリンクの説明）

起業家のイーロン・マスク氏の「SpaceX」
が手がける衛星インターネット通信サービス。
高度五五〇kmに三千以上の衛星が打ち上げ
られており、動画視聴にも利用可能な通信ス
ピードと低遅延を実現している。

ロシアのウクライナ侵攻時には、ウクライナ側
に無償で提供された。

現在は、専用の平面アンテナが必要だが、将来
的には、携帯電話から直接通信できるサービ
スを目指している。

○ナレーション終わり

へPart. 7 報酬へ

○ディックの隠れている地下室（室内）

ソファに足を組んでトレンドをくゆら
せて座っているディック。

スマホが鳴り、取る。

「四つ目の依頼」

ケビン（声）「ケビンだ。あんたに頼まれてたスマート・ウォッチの改造、終わったぜ」

ディック「……早かったな」

ケビン（声）「元々、こいつには心拍数測定機能と、緊急時に衛星へ発信する機能が付いてるからな。衛星発信機能に心拍数のデータを乗っけて、あんたのところに飛ばすだけだ。簡単なもんさ」

ディック「できたものを送っておいてくれ」

ケビン（声）「オ、オレがか？」

ディック「……怪しまれないようにな」

ケビン（声）「ちょっと待てよ！ まだ、やると

も何とも言ってねえぞ！」

ディック「……」

ディック「……追加料金を振り込んでおく」

ケビン（声）「ひょろ、任せてくれ！ 何かあつ

たら、次も呼んでくれよ！」

ディック「……頼んだぞ」

ケビン（声）「ところで、どこに送ればいいんだ？」

「四つ目の依頼」

ディック「……細かく調べてあるんだろう？」
ケビン（声）「まったく、あんたにやかなわねえ
や」

へPart. 8 偽装

○ゴーゴル社シアトルオフィス（外観・昼）

T「シアトル——USA——」

T「ゴーゴル社　シアトルオフィス」

○同・室内

購買担当者が、手押し台車を押しながら
廊下を歩いてくる。

購買担当者「デビット、ナイルから荷物だぞ」
デビット「ナイルから？　おれ、通販で何も頼
んだ覚えはないんだけど……」

荷物を受け取るデビット。

箱の上面にはナイルのロゴ。

箱を開けるデビット。

デビット「わお！、こりゃオレンジ・ウォツ

チじゃねーか！」

「四つ目の依頼」

デビットを取り囲み、オレンジ・ウオッチを覗き込む社員たち。

社員1「おい、見せてくれよ」

同僚たちを手で制するデビット。

デビット「待て待て。落ち着けよ」

デビット「あれ？ 手紙が入ってるぞ」

手紙を開けるデビット。

手紙を読み始めるデビット。

デビット「なになに、『親愛なるユーザー様へ

……」

○モノログ始め（手紙の文面）

ジム（声）平素はオレンジ社製品をご愛用頂き、ありがとうございます。このたび、次世代機開発のため、みなさまのお力をお借りし、たく、試作品をお送り致します。機能をお試し頂き、ご意見をお聞かせ下されば幸いです。尚、誤作動防止のため、緊急通信機能の設定変更はお控え下さい。

「四つ目の依頼」

心を込めて

オレンジ社 CEO ジム・クック

○モノローグおわり

驚くデビット。

デビット「え!? ああのジム・クックからかよ！
ちゃんとサインも入ってるぞ！ こりゃ本
物だ！」

社員1「すげえじゃないか、デビット。オレン
ジ社は社内情報を出さないことで有名だか
ら、試作品を渡すなんて話、聞いたことない
ぞ！」

社員2「そうだよ、こりゃお宝だ！」

社員3「そうだ！ このネタ、ITアナリスト
のナンシー・クオに話しちゃおうぜ！」

社員1「リークならマーク・ニューマンの方が
いいんじゃないか？」

デビット「バカ！ そんなことしたら、オレが
何されるか分かんねえだろ！」

社員4「……でも、デビット。お前、自分の持

「四つ目の依頼」

ってるだろ？」

デビットが別のスマート・ウォッチを付けているのが見える。

デビット「何、言ってるんだ。ジム・クック直々のお願いだぞ！ こっちを付けるに決まってるじゃねーか！」

送られて来たスマート・ウォッチを付けて、鼻歌を歌いながら、ほくほく顔でノートPCを操作するデビット。

Part. 9 四つ目の依頼

○マティ・ストールマンの自宅前の道路（数日後・夜）（資料12）

【資料12】マティ・ストールマンの自宅（イメージ）



<参考URL>
<https://himawari-resort.com/report/696/>

「四つ目の依頼」

T「シリコンバレー——USA——」

T「九月十二日、夜」

T「ゴーゴル社CEO マティ・ストールマン
の自宅……」

社用車が止まる。

後部座席のマティに向かって話す運転手。

運転手「マティさん、着きました。今日もお疲れ様でした」

マティ「ああ、ありがとう。君も早く帰って、家族とゆっくりしてくれ」

運転手「はい。それでは失礼します」

社用車から降りるマティ。

社用車を見送るマティ。

通用門を開けて自宅に入るマティ。

後ろから、声。

ディック「ゴーゴル社CEO マティ・ストールマンだな？」

驚いて後を振り返るマティ。

マティの自宅の塀の裏側に居るディッ

「四つ目の依頼」

ク。

ディックを見て驚くマティ。

マティ「！！」

マティ「デ……、Mr・ディック・西郷……なのですか？」

ディック「……訊いているのはこっちだ」

マティ「し、失礼しました。おっしゃる通り、私がゴーゴル社CEOのマティ・ストールマンです」

マティ「驚かせないで下さい、Mr・西郷」
ディック「……」

マティ「……しかし、あなたとお会いすると約束した日は、まだ先のはずですが……」

ディック「俺は、依頼者を100%信用している訳じゃない……」

ディック「特に、あんたは……な」

マティ「？ 私が、何かしたのですか？」

トレンドに火を点け、一回くめらせて、はくディック。

ディック「用件を聞こう……」

「四つ目の依頼」

マティ「わ、分かりました」

マティ「ターゲットは、私どもの会社の副社長
ジョン・ミトニックです」

ディック「……」

ディック「……理由は？」

手振りをしながら、少し訴えかけるよう
にディックに説明するマティ。

マティ「彼は、反トラスト法に強硬な姿勢を貫
いています。株主は仕方がないとしても、自
分の会社に外から圧力がかかるというのは、
私も納得がいかないところがある」

ディック「……」

マティ「……しかし、政府の言うことを無視し
てまで、このまま事業を続ける、ということ
が正しいとも思えない」

ディック「……」

マティ「だが、彼の考えは全てNOです。極端
過ぎる。それに、社内に不穏な空気があると
も聞いています。会社が内部から壊れるよう
なことは避けたいのです」

「四つ目の依頼」

ディック「……だから、ミトニックを始末する……、ということか？」

首を振るマティ。

マティ「し、始末だなんで、とんでもない！ そんな恐ろしいことは考えてもいません。彼の強引さを変えるような、警告を与えて欲しいのです。方法はあなたにお任せします」

少し節目がちに考えるディック。

ディック「……」

ディック「依頼内容は分かった……」

マティ、安堵の表情。

マティ「で、では……」

ディック「……だが、この依頼は受けられない」

マティ、納得がいかない表情。

マティ「な、なぜですか？ Mr. ディック・

西郷。何かご不満があるのですしたら……」

ディック「……俺に、それを答える義務はない」

マティ「……」

ディック「……代わりと言ってはなんだが、あなたに一つ頼みがある」

「四つ目の依頼」

マティ「?? 何でしょうか？」

マティと話すディック。

声は聞こえない。

マティ「そんなことでしたら簡単ですが、い

ったい……」

ディック「さっきも言ったはずだ……。俺に

答える義務はない……」

マティ「……」

ディック「ただ……」

マティ「ただ？」

ディック「あなたにとって、マイナスになる

ことはないだろう」

マティ「？」

トレンドを爪弾きで地面に落とすディ

ック。

通用門を開けて道路を歩いて去ってい

くディック。

Part. 10 準備（セッティング）

○シアトル・ケリー公園（朝）（資料13）

【資料13】シアトル ケリー公園



<参考URL>
<https://jp.trip.com/toplist/topexperience/>

「四つ目の依頼」

T「シアトルーUSAー」
T「九月十三日 朝」
T「ケリー公園……」
○同・駐車場入口（同）

Aber Eatsの車が公園に止まる。
車から降りる配達員。

ダンボールを持って公園内を歩く配達員。

バーベキューセットとレジャーシート
を見る配達員。

配達員「誰もいないけど、ここ……。取り敢
えず届けたことにしておかないとな」

配達員「しかし、平日の朝っぱらから、バーベキュー・パーティーでもするつもりか？　気楽なもんだ」

Part. 11 待機

○マウンテンビュー近くの市道（朝）

T「シリコンバレー……」

市道に止まっている偽装したTV中継車。

屋根にはパラボラアンテナ一台とスターリンク用アンテナ。

中継車に繋いでいる車載コンテナにはカバ―をかけた一人乗りのドロ―ン。

運転席に座っているディック。

TV中継車に近づいてくる保安官。

保安官、警棒で車のドアを「コンコン」と叩く。

保安官「よお。ケーブルTVか？」

ディック、保安官と目を合わせず前を向

「四つ目の依頼」

いたまま（以下同じ）、

ディック「……そうだ」

保安官「一人か？」

ディック「いや、仲間が後で来る……。俺は先

乗りしているんだ」

保安官「そうか……」

車載コンテナに目をやる保安官。

保安官「後ろのコンテナはなんだ？」

ディック「……撮影機材だ」

保安官「随分、変な形だな」

ディック「……最近のは、色々と複雑になって

いるんだ」

保安官「なるほどな。……ちなみに、どこを撮

るんだ？」

ディック「サンタ・クルーズだ」

保安官「どっちの方だ？」

ディック「……山だ」

ニコリとする保安官。

保安官「そうか、いい場所を選んだな。あそこ

は自然が多いし、綺麗だし、絵になるよ。マ

「四つ目の依頼」

ウンテンビューの地名の由来にもなってる
しな」

ディック「……」

保安官「若いー丁好きの連中は、ゴーゴル本社
とか、コンピューター歴史博物館とか、そん
なのにしに興味がないらしいが……」

ディック「……」

保安官「……いつ放送するんだ？」

ディック「……生放送だ」

保安官、手で額を叩いて、

保安官「そりゃ、残念」

保安官「まあ、ここの宣伝になるような、いい
のを撮ってくれ」

ディック「ああ」

保安官、車から離れて歩き出そうとして

止まる。

振り向く保安官。

保安官「あ、そうだ」

ディック「……」

保安官「……ワインも忘れないように頼むよ」

「四つ目の依頼」

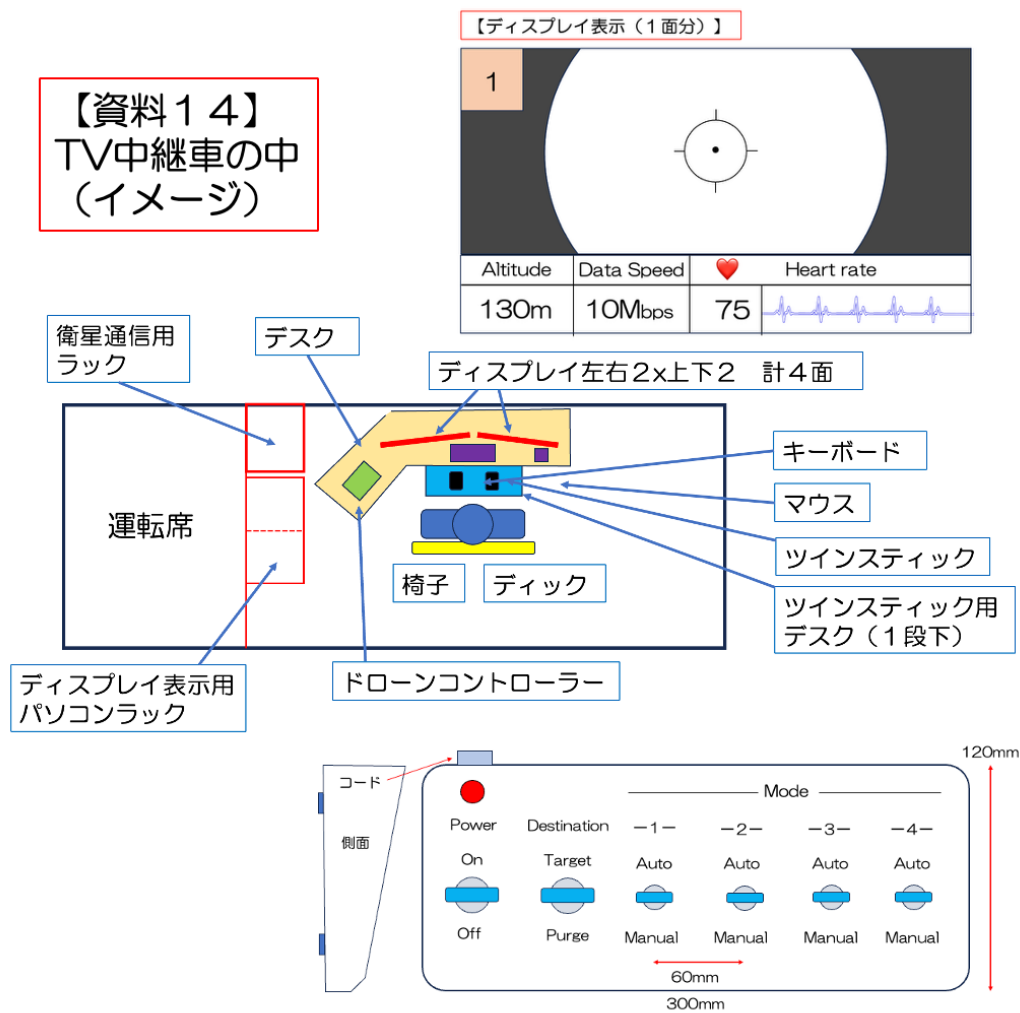
ディック「……分かれている」

TV中継車から離れていく保安官。

Part. 12 確認

○TV中継車の車内（ディックの作戦室）

（資料14）



「四つ目の依頼」

T「TV中継車内」

車内のディック。

ディックの前にドローンの照準器、高度、通信速度、ターゲットの心拍数が一つの画面に表示された4面のディスプレイ。ディックの手元にはドローンコントロールのツインスティック。ドローンコントローラーのパワーをオンするディック。

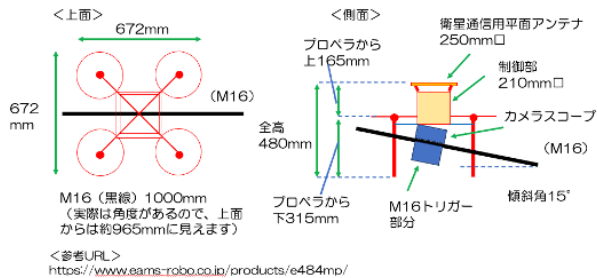
シアトルの配達員の置いた段ボールが開き、ドローンが浮上する。(資料1

5)

【資料15】ドローン（外形イメージと改造図）



<参考URL>
<https://www.eams-robo.co.jp/products/e484mp/>



「四つ目の依頼」

別の三ヶ所に置いてあるドローンも一
斉に浮上する。

シアトルのドローンが、市街地（シア
トルタワー）を見て、左に旋回してい
く。

画面を見るディック。

シアトルのドローンの画面で、高度の
表示を見る。高度が一三〇mに到達す
る。

ディックM「パイロード（積載量）は、大丈
夫のようだな……」

再び、画面を見るディック。

画面で通信スピードの表示と、カメラ映
像を見るディック。

ディックM「通信スピード、カメラも正常……」

三度、画面を見るディック。

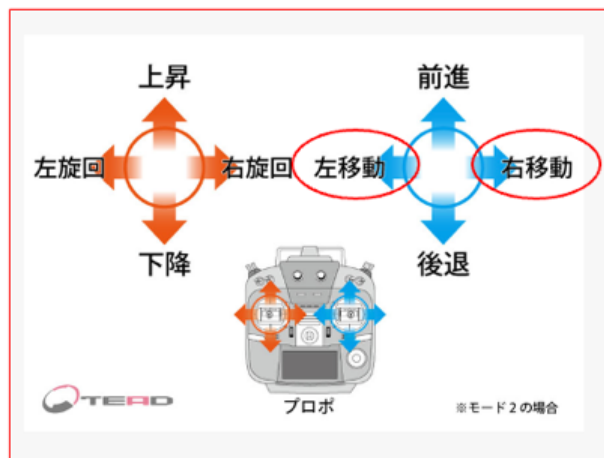
ディックM「心拍数検知 問題なし……」

一番のドローンコントローラーのスイ
ッチを、オートからマニュアルに切り替
えるディック。（資料16）

「四つ目の依頼」

右手のツインスティックを左へ傾ける
ディック。
ドローンが左に動く。
逆に右手を右に動かすディック。
ドローンが右に動く。

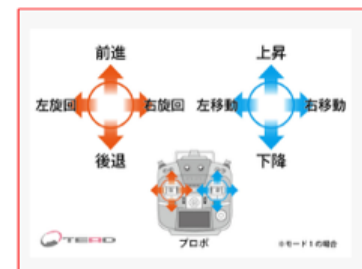
【資料16】ドローンの操作と動き（モード2（海外））



<参考URL>

<https://www.tead.co.jp/blog/ドローンの基本操作モード1とモード2の違いって/>

<参考（モード1：主に日本）>



ディックM「……タイムラグ（時間遅れ）も、
許容範囲内だ……」

Part. 13 決行

○ゴーゴル社 シアトルオフィス（昼・外観）

T「シアトル ― U S A ―」

T「ゴーゴル社 シアトルオフィス……」

○同・オフィス内（同）

周りを見渡しながら、二階のデスクに座
ってノートPCを開くデビット。

デスクの仕切りから乗り出して、一階の
管理責任者の後ろ姿を覗き込むデビッ
ト。

デビット、左の階段を確認する。

スマート・ウォッチを見る。

デビットM「もうすぐ時間だ……」

デビットM「あいつが腕を撃たれたら、助ける
ふりをして近寄る。そして制御PCでリミッ
ターを外して、電圧を上げればいい。頼むぜ」

「四つ目の依頼」

ドローンがシアトルオフィス二〇〇m
まで近づく。

ツインスティックを調整して、カメラス
コープ越しに、デビットのこめかみに照
準を合わせるディック。

ツインスティックのトリガーを弾いて、
狙撃するディック。

銃声が鳴る。

デビットのこめかみが撃たれ、椅子にも
たれるように倒れる。

腕はダランと垂れている。

社員たち「うわあゝ、逃げろ！」

デビットの座っている机から離れる社
員たち。

シアトルのドローン制御画面を見るデ
ィック。

心拍数表示で、波形がゼロになり、「ピー
と音が鳴る。

ディックM「……心停止確認」

ツインスティックを調整して、カメラス

「四つ目の依頼」

コープ越しにスマート・ウォッチ（SW）に照準を合わせるディック。

ツインスティックのトリガーを弾いて、狙撃するディック。

銃声が鳴る。

銃弾でSWが砕け散る。

X

X

X

○ゴーゴル社　チャペルヒルオフィス（同時刻）

T「チャペルヒル　　―USA―」

T「ゴーゴル社　　チャペルヒルオフィス……」

依頼者Bが既に頭を撃ち抜かれて、床上向けで倒れている。

銃声と共に、SWが狙撃される。

銃弾でSWが砕け散る。

X

X

X

○ゴーゴル社　ニューヨークオフィス（同時刻）

T「ニューヨーク　―USA―」

T「ゴーゴル社　　ニューヨークオフィス……」

依頼者Cが既に、頭を狙撃され、机に

「四つ目の依頼」

うつ伏せになっている。

銃声と共に、S Wが狙撃される。

銃弾でS Wが砕け散る。

X

X

X

○ F B ー ピツツバ ー グ支局（同時刻）

T ー ピツツバ ー グ ー U S A ー

T ー F B ー ピツツバ ー グ支局……

支部の窓越しに歩いているロバート。

S Wで時間を確認するロバート。

ロバート M ー そろそろ、時間だな……

ロバートに照準を合わせるディック。

ロバート M ー これで、オレもやっと……

トリガーを弾くディック。

銃声が鳴る。

頭を狙撃されて倒れるロバート。

カメラスコップ越しに、建物の壁でS Wが見えないことに気づくディック。

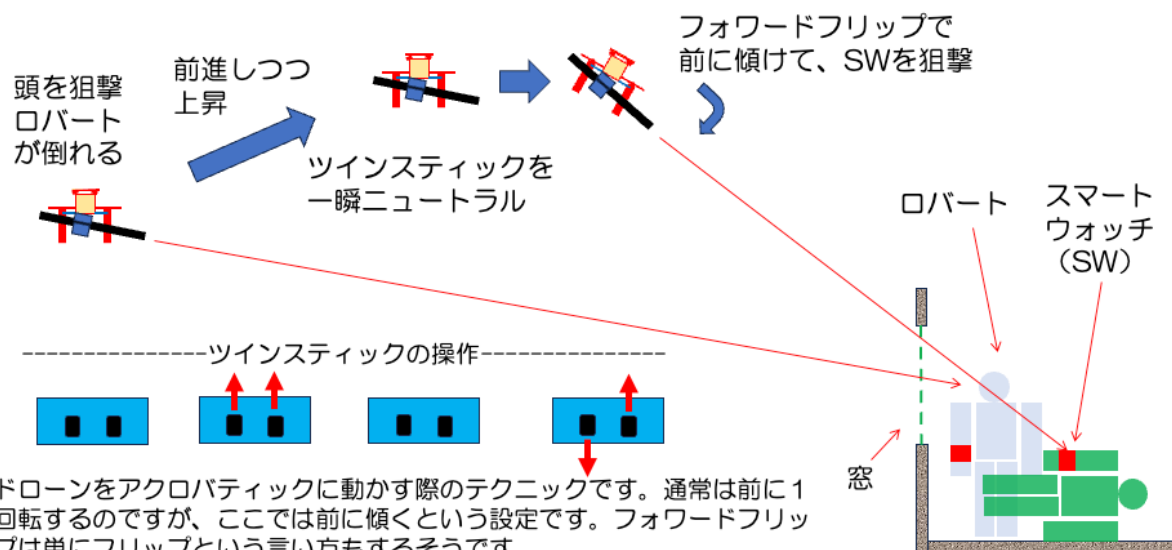
（資料 17）

「四つ目の依頼」

デ
イ
ツ
ク
M
「
…
…
フ
ォ
ワ
ー
ド
フ
リ
ッ
プ
」

デ
イ
ツ
ク
M
「
…
…
ド
ロ
ー
ン
を
前
進
し
つ
つ
、
上
昇
さ
せ
る
デ
イ
ツ
ク
」

【資料17】ロバート（FBI）を狙撃する時のドローンの操作方法と動き



<参考URL>

<https://www.youtube.com/watch?v=ZZNnkc5BrNE>

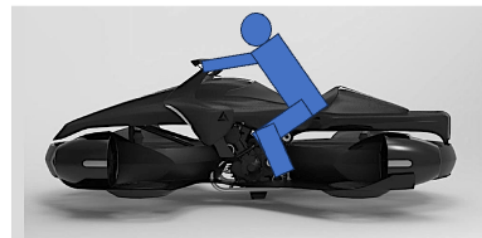
一瞬、スティックを両方離して、ニュートラルに戻すディック。
素早く左のツインスティックを手前に、右を奥に動かすディック。
前に傾くドローン。
カメラスコープの射界にSWが入り、照準を合わせる。
トリガーを弾いて、狙撃する。
銃声が鳴る。
SWが破壊される。
ドローンコントローラーのスイッチを「Purge」にする。
ターゲットの建物から離れていく各ドローン。
M16を持ってTV中継車の扉を開け、飛び出すディック。
車両コンテナのカバーを外して、一人乗りドローンに飛び乗るディック。
ドローンで飛び立つディック。

（資料 18）

「四つ目の依頼」

Part. 14 約束

【資料18】一人乗りドローン



<参考URL>
<https://www.nippon.com/ja/in-depth/d00523/>

○ ゴーゴル社 本社（外観・同時刻）
T 「マウンテンビューー | USA」
T 「ゴーゴル社 本社……」
○ 同・社内

本社内で、ジョンの部屋に向かって歩いているマティ。

（回想シーン始め（マティの自宅））

マティの自宅の壁裏で、マティとディックが話をしている。

「四つ目の依頼」

ディック「ミトニックを明日の一三時〇五分に、
あんたたちの横の公園に連れ出してくれ：
」

マティ「横の公園：：と、言いますと、チャー
ルストン・パークでいいのですか？」

ディック「：：：そうだ」

（回想シーン終わり）

ジョンの部屋へ向かっているマティ。

マティ「なぜ、私にこんなことを依頼したのか
分からないが：：」

マティ「マイナスにはならないと言っていたが、
その事に何か関係があるのだろうか：：：？」
マティ「ただ、彼は時間に厳しい人だと聞いて
いる。とにかく約束は守らないと：：：」

ジョンの部屋へ向かうマティ。

○シリコンバレー 上空（同）

一人乗りドローンで、山沿いを飛ぶディ
ック。

「四つ目の依頼」

後輪を滑らすように、右九〇度に曲がる。
ゴーグル本社のあるマウンテンビュー
へ向かうディック。

○同 ミトニックの執務室（同）

ガラス張りのジョンの部屋。

ジョンが、ノートPCで仕事をしている。
ジョンの部屋のドアをノックするマテ
ィ。

マティ「ジョン、ちょっといいか？」

ジョンがマティに気づき、目を上げる。

ジョン「マティか。どうした？」

マティ「ジョン、横の公園で外の空気でも吸い
に行かないか？」

ジョン「？」

SWで時計を見るジョン。

時間は十三時〇五分。

ジョンM「……もうすぐ始まるってのに、タイ
ミングが悪いな……」

ジョンM「でも、ここで変な動きをして、怪し

「四つ目の依頼」

まれても面倒だ……」

マティ、ジョンを見て、

マティ「どうした？ 都合でも悪いのか？」

ジョン「い、いや行くよ。昼飯食べたから、少しスッキリしたいと思ってたところなんだ」

Part. 15 自戒

○チャールストン・パーク（資料19） 本社
横（資料19）

【資料19】チャールストン・パーク



<参考URL>
<https://earth.google.com/web/>

「四つ目の依頼」

【資料20】反トラスト法に対する対策



「優れたエンジニアリングの結果」というグーグルの主張

グーグルを相手どった今回の裁判では、市場独占状態を維持するいくつかの戦略を禁じるシャーマン法への違反が2件あると訴えられている。

1件目に関しては、グーグルがアップルやサムスンなどのスマートフォンメーカー、モジラなどのブラウザ開発企業や組織、そしてベライゾンやAT&Tといった通信事業者と収益を共有する代わりに、これらの企業のシステムにおいて標準の検索プロバイダーとして採用を求めていることが問題視された。具体的には、これによって違法に競合他社を駆逐する違法な試みにあたると、連邦検察官は主張することになる。

こうした企業との提携契約においてグーグルは数十億ドル(数千億円)を支払っているが、あらゆるシステムのユーザーに対して広告を表示することで、さらに数十億ドル(数千億円)多くの収入を得ている。「グーグルは検索サービスの重要な配布経路を独占しているのです」と、コロラド州司法長官のワイザーは言う。

検索というサービスの性質上、グーグルが人々の興味関心や行動についてのデータを独占状態を生かしてより多く収集できれば、そのぶん検索結果の精度も広告の効果も向上する。それによってグーグルには広告収入が流れ込み続けるわけだ。

この「好循環」についてグーグルは、優れたエンジニアリングによって公正な形で生み出されたものであり、ユーザーがスマートフォンやウェブブラウザで標準であるグーグルからほかの企業の検索サービスに切り替えることを阻止した結果ではないと主張している。「グーグルは最高の検索エンジンを開発できたことで、ネットワーク効果の恩恵を受けられてきたと主張するでしょう」と、ペンシルベニア州立大学の法学教授で今回の訴訟を追ってきたジョン・ロバトカは言う。

<参考URL>

<https://wired.jp/article/>

(資料20)

「チャールストン・パーク」
公園で並んで歩いているマティとジョン。
マティ「ところでジョン、反トラスト法の件は
大丈夫なのか？」
ジョン「ああ、任せてくれ。オレたちのエンジ
ニアリングの結果、という線で押そうと考え
ている」

「四つ目の依頼」

マティ「……」

ジョンはマティに向かって手を開いて、
ジョン「マティ、考えても見てくれ。今のオレ
たちは、一生懸命働いて、努力して、新しい
技術で新しいサービスを提供したからこそ、
ここまで大きくなったんじゃないか」

ジョン「それを見ずに、ただ大きくなったから
『独占だ』っていうのは納得できないね」

マティ「……」

ジョン「大きくすることが目的だったんじゃない
くて、結果としてそうなったってことだろ？」

マティ「……そうだな」

ジョン「……」

マティ「ただ……、これだけ多くの従業員を抱
えていることも、また事実だ……」

マティは上を向いて、

マティ「創業の頃から続けてきた週一回の従業
員全員でのミーティングも、月一回になった
……」

マティはジョンを見て、

「四つ目の依頼」

マティ「私はCEOとして、従業員の生活を守る責任がある。もちろん、彼らの能力を、最大限発揮できる環境を作ること……」

マティ「大きくなると、当然、私の目が届かないところも多くなる」

マティ、ジョンから目を逸らして、

マティ「これからも会社として、CEOとして、このままでうまくやっていけるのか不安なんだ……」

X

X

X

○ゴーゴル社 本社近くの上空（同）

一人乗りドローンをホバリングし、高度を下げていくディック。

X

X

X

○チャールストン・パーク（同）

ジョン「マティ、言いたいことは分かる。だがオレたちはもうベンチャーじゃない」

ジョン「この裁判に負ければ、オレたちのサード・ビスを使ってくれているユーザーに迷惑がかかる。そうになったら、オレたちは悪者だ」

「四つ目の依頼」

マティ「そう……だな」

ジョン『Don't Become a Devil（悪魔になるな）』。オレたちのモットーだろ？」

ジョンは左手でマティの背中をポンと叩く。

X X X

○一人乗りドローン運転席（同）

スマホをタッチし、メッセージを送信するディック。

M16を構えるディック。

X X X

○チャールストン・パーク（同）

マティの背中叩いた状態で、ジョンのSWが鳴る。

ジョン「あ、ちょっと、すまない」

SWの画面を見るジョン。

画面には「13..13 You have become a devil（前は悪魔になった）」の表示。

「四つ目の依頼」

驚くジョン。

ジョン「！！」

青ざめて左右をきよろきよろするジョン。

ジョン「う、うわあゝ！」

社屋の方に向かって走るジョン。

ジョンに手を向けるマティ。

マティ「どうした？ ジョン」

スコープに走るケビンを捕捉するディック。

焦点を合わすディック。

トリガーを引くディック。

銃声が鳴る。

こめかみを撃たれ、倒れるジョン。

倒れるジョンを見るマティ。

手で頭を抱えて、その場でうずくまるマティ。

マティ「うわっ！」

社員数人、気づく。

社員（声）「おい！ 誰か倒れているぞ！」

「四つ目の依頼」

社員（声）「救急車を呼んでくれ！」

手を解いて倒れているジョンを見るマ
ティ。

マティ「これは……、彼がやったのか……？」

立ち上がって、倒れているジョンを見る
マティ。

マティM「ジョン……」

マティ「Don't Become a De

vil（悪魔になるな）……」

空を見るマティ。

マティM「私は……、悪魔にならなかったのだ
ろうか……」

X

X

X

TV中継車を運転して立ち去るディッ
ク。

— F i n —

（2023年11月 初稿）

（2026年9月22日 改訂稿）